

下侍塚古墳
の大きさ

鏡と鉄製品

土師器の高杯

下層の出土品

下侍塚古墳の計測図

粘土の説明？

土師器の壺

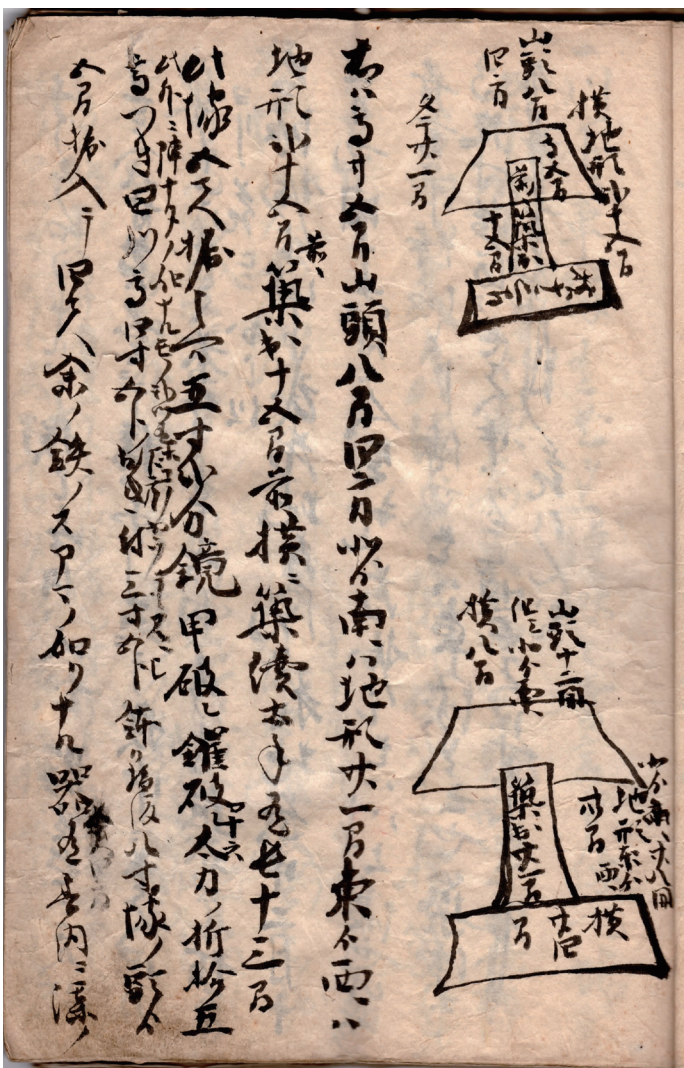
調査の経過

古墳の名称

壺形土器の
大きさ

右は高さ五間(後方部高さ9メートル)、山の頂上は八間(15メートル)四方で、北から南への地形は二十一間(後方部長さ38メートル)、東から西への地形は二十五間(後方部幅45メートル)、前へ出るように築いた十五間(前方後方墳のくびれ部長さ27メートル)、前から横方向に築いた土手が長さ十三間(前方部幅23メートル)。

この塚を五尺(1.5メートル)掘りましたところ、五寸二分(直径15.8センチ)の鏡、かぶとの破片、よろいの破片十六、折れた刀が十五、この他に陣ナタのようなものが二つあってホコ(ヤリ)のようにも見える。高杯が四つあって高さが四寸五分(14センチ)で下に三寸五分(11センチ)の台がつき、鉢の直径が八寸(24センチ)。塚の頂上から五間(9メートル)掘り下げて、四尺(1.2メートル)ほどの鉄のスアマ(意味不詳)のような器がある。五尺(1.5メートル)四方で、その内側に漆の



上侍塚古墳の計測図

ねり土のやわらかいもので積んである。その中にまた鉄の器があつて長三尺(90センチ)で、横幅は一尺八寸(54センチ)、これは墨で漆をぬった土を積んである。その中に一尺(30センチ)四方ほどの茶クリ(意味不詳)があつて、その中に水がある。つきだした土手(くびれ部)横土手(前方部)から花瓶(土師器の壺形土器)が出た。

右の塚を掘りました時、武茂(現・那珂川町馬頭)の地藏院にお願ひして、(発掘する前)地鎮祭をしたのは申(さる)の二月十三日である。十六日に作業員を出して発掘した。これは(那珂川の)川上にある塚で、この塚を世間では下侍塚と申し伝えている。これを車塚と呼んでいる。続けて造つてある土手(前方部)に高さ九寸(27センチ)、径一尺(30センチ)、壺の途中がくびれていて周囲が一尺四寸五分(44センチ)ある花瓶(土師器壺形土器)が出た。

